

支局メール

昔ながらの風情残る「島婚」

「まるで映画のタイタニックみたい！」。真っ白なウェディングドレスを着た花嫁がヨットの先端に立って、瀬戸内海の男木島（高松市）にやってきた。新潟出身の新婦に、瀬戸内の島の魅力を体感してもらおうとの演出だ。港では花婿、友人と一緒に、心温かい島民の人たちが出迎えた。

5月中旬、男木島で開かれた「市民結婚式」。ヨットの上で結婚の宣誓をし、「男木交流館」で披露宴が執り行われた。会場では、島の主婦らが地元タコの天ぷらや南京豆の煮物などを用意し、白い割烹着を着てふるまった。リーダーの河原久美子さん（74）は、男木島生まれ。



香川

れ。同級生らが島から離れる中で「ふるさと」の移り変わりを知られて、島におってよかった。みんなが帰ってきたときに寄れる場所になれた」と胸を張った。

河原さんが結婚した頃は、嫁入りの時にタンスなどの道具を男性が担ぎ、女性たちが白い割烹着を着て「男木伊勢音頭」を歌いながら島中を練り歩く風習があったと教えてくれた。「嫁に行ったら、実家の敷居をまたぐな」と言われていた時代に、「辛かったらすぐ帰ってこいよ」という歌詞もあったという。

「いろんな島を訪れたが、男木島がいちばん居心地が良かった。自分を受け入れてくれるから」。高松出身の新郎は、島で結婚式を挙げた理由をそう話した。昔ながらの風情が残る「島婚」には、地元の人たちの「思い」が込められていた。（秋山由美子）